

日本の都市は、最近、きわめて急速に変容しつつある。人口都市集中、とくに、東京地域への集中はあまりにも顕著である。武蔵野台地の都市化は、既に東京都の範囲をこえて、埼玉県南部へ急速に伸びている。下総台地 相模原台地などの台地の都市化もまた、きわめて急速である。欧米の都市ではあまり顕著でない沖積地の都市化も急速に発展し、とくに、川崎市や埼玉県南東部で大規模な都市化が進んでいる。

以上のように、洪積台地と沖積低地の都市化は、都市化の普通の形態として見ることができるが最近の大きな特徴として、丘陵地の都市化が考えられる。もちろん、第2次大戦前から、丘陵地や山地山麓部においても都市化が見られた。この傾向は、とくに阪神地域で顕著であった。しかし、現在では、阪神地域はもとより、東京地域においても丘陵地の大規模な都市的開発が進められている。そのうち、とくに有名なのは東京急行田園都市線沿線の「多摩田園都市」開発である。同じ東京急行沿線の開発に、戦前の田園調布地区の開発があるが、今回ののは、大規模な地形の改変を伴うという点に大きな特徴が見られる。

千里ニュータウンをはじめ、現在開発・計画中の多摩田園都市・多摩ニュータウン・研究学園都市・泉北ニュータウン・高蔵寺ニュータウンなどは、開発する地形条件、都心よりの距離、開発の規模、都市景観などにおいて、戦前のものとは大きく異なっている。

これは欧米先進国が比較的最近経験した巨大な都市化に似ているが、日本のように高人口密度で平坦地が相対的に乏しく、異なった文化遺産をもつ国において、これからどのような都市化を進めるべきかを、われわれは考えてみる必要がある。

☆ 貝山久子

就任以来机の場所は変わっても、決して出ることのなかった第2研究室を、最近遂に離れて、勿体なくも渡辺先生と同室に机を置くことになりました。目下のところは第1研究室と第2研究室の両棲動物のようなあんばいです。これは大学院がこの5月から発足して、学生が2人入学し、その機の置場所が必要になったこと、また昨秋から渡辺先生が文教育学部長になられたので、秘書(教務補佐員)という名目で本年卒業の高田和枝さんが研究室勤務になられたために、第2研究室がやや Over population になったからです。本の貸出し、プリント作り、資料の整理、電話、掃除 etc 大いに手伝って頂いて研究室もにぎやかになりました。研究室に籍を置き乍ら研究にあまり熱心でないというのはまことに申訳のないことですし、いろいろ体制のととのったところで、教室の事務やその他の雑用の合間に、少しずつでも勉強をつづけなければと思っています。

不惑の年などといわれる40才にいつの間にかなってしまう、健康診断で血圧を測られて改めて

年よりであることを意識しています。ただ私はどうも友人等に較べて精神年齢が若く(つまり幼稚)不感どころか有感だらけのこのごろです。母親であり、また妻であり乍ら仕事をもっているというのは、勿論経済のためばかりではないのですが、仕事をもつ必然性と、家族とくに子供に強いる犠牲を天秤にかけたとき、ふと迷ってしまうのです。娘はそれぞれ小学4年と2年になり、あまり問題なく育っており、所謂手は離れているのですが、精神的には却って母親を必要としているように思えます。育児にも教育にも最も必要なのは親または教育者の忍耐力である筈です。にもかかわらず子供と接する時間があまりにも短いために、焦りすぎ欲張りすぎてついヒステリーをおこしてしまいます。そういう心の余裕のなさが反映しはしないか、真剣に考えることがあります。仕事をもつことには勿論よろこびも意義も見出していますけれど、出処進退、自分の意志一つとなると却って迷ってしまうものです。

昨年からは柄にもなく菊作りをはじめました。幸田先生が「菊作りも子供を育てるのも要領は同じ、お盆位の花が咲く」とのお言葉を添えて、苗をわざわざ持って来て下さったのがはじまりです。馴れぬ手つきで芽をさしたり、肥料をやったり、また留守の間に暴風雨になったりすると、叶わぬ乍ら案じたりするのは、育児と全く同じですが、もの云わぬ植物にはヒステリーをおこすこともなくそこだけは大違いと思っていたらケーキ皿位の花しか咲かず、またまた考えさせられてしまいました。

今年の夏は子供をつれて磐梯山麓に行く予定。また8月末に太平洋学術会議が開かれますので、シンポジウムだけでも出席して、国際会議の雰囲気味わいたいと思っています。

☆ 岡 崎 セ ツ 子

本学松井先生の研究室に助手として勤め、今年は3年目になります。仕事の大部分は松井先生の那須野盆地研究の統計等に関する雑用です。他に浅海先生の下で土壌の粒度分析・粘土鉱物の示差熱分析等を行なっています。さらに2年生の地図学演習では、地形図を利用した各種計測等について式先生の御手伝いをしています。

個人的な仕事としては、「立川段丘面における関東ローム層の厚さの場所による違い」について纏めているところです。この他、1/5万地形図の読図・地形計測等によって、日本の山頂平坦面について調べています。勤めがありますので、いずれも、三余(冬、夜、陰雨)に非ず一余をもつてすること故、仲々はかどりません。